



**東京大学 公共政策大学院 医療政策教育・研究ユニット**

**Health Policy Unit (HPU)**

**医療政策実践コミュニティー**

**Health Policy Action Community (H-PAC)**

**第3期（2013年度）活動報告**

**2014年6月**

**H-PAC 運営事務局**



## ■東京大学 公共政策大学院 医療政策教育・研究ユニット(Health Policy Unit=HPU)の活動内容

**教育活動:** 東京大学公共政策大学院において「医療政策」「事例研究」の講義を行います。

**研究活動:** 医療政策における喫緊の課題に関する研究を行います。

**社会活動:** 医療政策実践コミュニティ(H-PAC)の主宰と公開シンポジウムを開催します。

## ■HPU 運営体制

東京大学公共政策大学院と大学院経済学研究科の教員・研究員により運営されております。

〔**スタッフ**〕埴岡 健一 客員教授／井伊 雅子 特任教授／辻 哲夫 特任教授／関本 美穂 非常勤  
研究員／吉田 真季 特任研究員／高橋 陽子 特任専門職員

〔**運営委員**〕岩本 康志 教授／伊藤 隆敏 教授／関 啓一郎 教授／大橋 弘 教授

## ■寄付企業・団体

日本イーライリリー株式会社、三井物産株式会社、グラクソ・スミスクライン株式会社、社団法人全国社会保険協会連合会、フクダ電子株式会社、公益社団法人日本医師会、日本医師会総合研究機構、テルモ株式会社、東レ株式会社、オリンパスメディカルシステムズ株式会社、旭化成メディカル株式会社、旭化成ファーマ株式会社、ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社、一般社団法人日本病院会(団体名は申込順)からの寄付を基に運営しております。

## ■医療政策実践コミュニティ(Health Policy Action Community=H-PAC)の活動内容

「医療を動かす」をミッションに掲げ、患者・市民、政策立案者、医療提供者、メディアの4つの立場から医療政策分野においてリーダーシップを発揮している社会人(学生も可)の参加者を募ります。医療政策の最先端課題を学び、さらに実践的なグループ活動により、政策提言や事業計画作成を行います。なお、大学の卒業資格や学位、単位などにはなりません。



## ■H-PAC 運営体制 (2013 年度実績)

【**外部アドバイザー**】大熊 由紀子氏(国際医療福祉大学大学院医療福祉ジャーナリズム分野 教授)[メディア]／勝村 久司氏(医療情報の公開・開示を求める市民の会 世話人)[患者支援者]／高本 真一氏(三井記念病院 院長)[医療提供者]／信友 浩一氏(九州大学 名誉教授)[政策立案者]

【**メンター**】伊藤 雅治氏(元厚生労働省医政局 局長)[政策立案者]／前村 聡氏(日本経済新聞社大阪本社編集局社会部 記者)[メディア]／三田村 真氏(NPO法人全国骨髓バンク推進連絡協議会 副会長)[患者支援者]／渡邊 清高氏(帝京大学医学部内科学講座腫瘍内科 准教授)[医療提供者]

【**HPU内部アドバイザー**】井伊 雅子(東京大学公共政策大学院 HPU特任教授)／辻 哲夫(東京大学公共政策大学院 HPU特任教授)

【**運営事務局**】埴岡 健一(東京大学公共政策大学院 HPU客員教授)／吉田 真季(東京大学公共政策大学院 HPU特任研究員)／高橋 陽子(東京大学公共政策大学院 HPU特任専門職員)

## ■H-PAC 第3期プログラム概要

プログラムはグループ研究、リーダーシップ研修、レクチャー&ディスカッションという3要素で構成しました。要素間で相乗効果が生まれるようにスケジュールを組み、6月から12月までは3要素が並行し、1月以降はグループ研究に絞るかたちで進めました。定例の開催時間帯は水曜 19-21時です。

### 〈1〉グループ研究

○『グループ研究』は、H-PAC参加者が自主的にグループを形成し、自分たちで設定するテーマについて、社会への発信・提言を目的とした研究・実践活動を行うものです。各グループにはメンバーとして4つのステークホルダーから各1人以上が参画することを必須条件としました。

○成果物提出期限に向けて、各グループ主体で研究を推進します。事務局では、グループ形成やテーマ設定の助けとなる場づくりを行い、活動期間には、メンター／アドバイザーによるアセスメント(全3回)、中間報告会の場を設けて研究の進捗支援を行いました。

○毎週水曜の定例時間帯に打ち合わせ会場を設けるほか、各グループが自発的に集い、話し合いやフィールドワークを進めました。また、インターネットなどを活用した議論も積極的に行われました。

○成果物の形態は、各研究グループが以下の中から選択し、設定しました：

政策提言書／事業・非営利活動事業計画書／研究報告書

○成果物の審査・評価は、4ステークホルダーで構成される採点委員会により、以下6軸に沿って行いました：

ステークホルダー協業によるシナジー／テーマの重要性・喫緊性／実践・実現可能性／視点や切り口の新規性・独創性／論理性・実証性／表現力・訴求力

### 第3期グループ研究 7つのテーマ

テーマ・タイトル	形態	研究グループ メンバー内訳
広域医療介護提供体 (Integrated Healthcare Network) 日本導入に向けての考察ー建設的な国民的議論展開への準備ー	政策提言書	患者支援者 2 政策立案者 4 医療提供者 4 メディア 3
患者情報 SNS(ソーシャル・ネットワーク・サービス)設立プロジェクト	事業計画書	患者支援者 2 政策立案者 1 医療提供者 1 メディア 1
保険者が拓く糖尿病治療の未来～重症化予防で期待される保険者の役割～	政策提言書	患者支援者 1 政策立案者 2 医療提供者 3 メディア 4
『医師に対する“死の教育・研修”の充実を』～自分らしく、より良い最期を迎えるために・・・～	研究報告書	患者支援者 2 政策立案者 3 医療提供者 4 メディア 2
安心・納得・幸せなお産：周産期医療の質の向上を目指して	政策提言書	患者支援者 2 政策立案者 2 医療提供者 3 メディア 1
「地域包括ケアシステム」への「住民参加」の研究 ～大都市郊外エリアを焦点に～	政策提言書	患者支援者 2 政策立案者 3 医療提供者 3 メディア 2
医療有害事象発生時の真実説明と謝罪の普及について	政策提言書	患者支援者 1 政策立案者 3 医療提供者 2 メディア 2

## 〈2〉リーダーシップ研修

○『リーダーシップ研修』は、H-PAC参加者が主体的に「医療を動かす」ための気づきやヒントを得る機会になることをねらいに実施しています。

○プログラムの序盤と終盤に設けるレクチャー形式の勉強会、アドボカシーの実践論を学ぶワークショップ、ロールモデルの実践に学ぶ研修会という内容で行いました。

## 〈3〉勉強会

○『レクチャー&ディスカッション』は、異なる背景をもつ参加者が、グループ研究に先立ち、医療政策・制度・システム等に関する基礎的知見や手法を共有することを目的に設計されています。

○「リーダーシップ」「実践の手法」「政策の知識」では、計12のテーマを設定し、気鋭の講師を招聘して、レクチャーとグループワーク(4つの立場の混在する班にわかれ、講師の提示する課題についてディスカッション)を行いました。

○勉強会後は自主的な懇親会が開かれ、インフォーマルで活発な議論が展開されました。

### 第3期勉強会のテーマと講師（区分ごと開催順、敬称略、肩書は勉強会実施当時のもの）

区分	テーマ	講師
リーダーシップ研修	リーダーシップの旅	野田 智義（NPO 法人 ISL 理事長）
	政策提言演習	事務局
	ロールモデルに学ぶ 〈市民・患者支援者〉	湯浅 誠（特定非営利活動法人自立生活サポートセンター・もやい 事務局長）
	ロールモデルに学ぶ 〈医療提供者〉	石川 誠（医療社団法人輝生会 理事長）
	ともに生きる医療	高本 眞一（三井記念病院 院長）
レクチャー&ディスカッション	医療政策決定プロセス	曾根 泰教（慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授）
	医療・福祉財政論	新川 浩嗣（財務省主計局 主計官）
	診療報酬制度	迫井 正深（厚生労働省老健局老人保健課 課長）
	政策評価	宮田 裕章（東京大学大学院医学系研究科 准教授）
	喫緊の医療政策課題	林 敦彦（朝日新聞社科学医療グループ 次長）
		前村 聡（日本経済新聞社大阪本社編集局社会部 記者）
	超高齢社会と地域医療	辻 哲夫（東京大学公共政策大学院 特任教授）
	市民主導の医療	埴岡 健一（東京大学公共政策大学院 客員教授）
	地域とプライマリ医療	井伊 雅子（東京大学公共政策大学院 特任教授）
	医療と安全	児玉 安司（東京大学公共政策大学院 特任教授）
	医療・福祉とコミュニティ	中村 秀一（内閣官房社会保障改革担当室 室長）
	医療の質と情報	埴岡 健一（東京大学公共政策大学院 客員教授）
医療倫理	糸 和彦（名古屋市立大学大学院薬学研究科 教授）	



勉強会風景



グループ研究風景

### 〈3〉公開シンポジウム

HPU/H-PACの活動の一環として、これまでに3回の公開シンポジウムを開催しました。概要は下記のとおりです(詳細なレポートはウェブサイトに掲載しております)

#### ○2010 年度

**2010年6月26日 [HPU 創設記念シンポジウム]「医療の質はどこまで見えるか ～データ活用で拓く将来像～」(於:東京大学 鉄門記念講堂)**

医療の質の改善と均てん化(あまねく質の高い状況)の実現は、医療における現在の最大課題のひとつであり、そのためにはデータの活用が鍵となると考えられます。このテーマに関して、医療提供者、政策立案者、有識者、メディアと異なる立場の4人が基調講演をしました。医療の質と結びつけた診療報酬の支払い方法、データに基づいた診療報酬算定の可能性、在宅医療や地域医療における患者の生活の質を評価する方法など、課題の打開策に向けた新しい視点を含む重要な論点が示されました。

その後のパネルディスカッション「医療の質は見えるか」では、医療の質を測るデータの利用方法に関して具体的な提案も行われるなど、活発な議論が展開されました。

#### ○2011 年度

**2011年10月10日 「医療政策の喫緊2テーマを考える」(於:東京大学小柴ホール)**

診療報酬・介護報酬、医療計画という日本の医療の根幹を形成してきた2つの仕組みが改定され、今後の医療のあり方が方向づけられる局面を迎える中、4つのステークホルダーが集い、認識を共有した上で、多様な観点からの意見を集約し、実践の方向性を共に考える場とすべく、企画いたしました。

パート1「診療報酬編」では、現状と課題について政策立案者・患者支援者の立場から講演いただき、その後のパネルディスカッションにおいて、医療提供者・メディアの方も加わり、いま必要な診療・介護報酬改定を議論しました。また、パート2「地域医療計画編」では、医療計画見直しの議論の概要、地域の医療機能を知ったうえでの計画立案に必要なデータベースの紹介、東京および石巻での地域医療の実践例の報告、を講演いただいた後、患者支援者・メディアの立場の方も参加し、パネルディスカッションを行いました。

150人以上の方にご参加いただき、満席のフロアからの発言も交えた活発な議論が展開されました。

○2012 年度

2012 年 8 月 18 日 「徹底研究: 医療を動かす、医療計画作りとは」(於: 東京大学 伊藤謝恩ホール)

昨年度のシンポジウムに引き続き、各都道府県で 2013 年 4 月から実施されるべく策定されている途上の医療計画をテーマとしました。「5 疾病・5 事業および在宅医療」の連携体制の構築を具現化するため、どのようなプロセスで、どのような計画を作ればいいのか、考える機会としました。

パート 1「医療計画について」、パート 2「良い医療計画の作り方」、パート 3「地域の立場から」、パート 4「在宅とがんの計画の場合」では、有識者、政策立案者、医療提供者、患者支援者の立場の演者 11 人にご講演をいただきました。その後、講師と 152 名のご来場者と一緒にディスカッションを行いました。実際に計画作成に携わっている地方自治体行政担当者の方々も多数来場されており、活発な議論が展開され、課題と実行につなげる方策などが浮き彫りになりました。

○2013 年度

2013 年 9 月 22 日 「2025 年に向けた医療計画と診療報酬の姿～いま何に着手すべきか～」(於: 東京大学 小柴ホール)

2011 年度、2012 年度のテーマをさらに深く掘り下げるかたちで、医療計画と診療報酬を取り上げました。冒頭講演によって社会保障改革国民会議の報告書が示す 2025 年の医療・介護のイメージを理解したうえで、パート 1「医療計画編～新計画はどこまで進歩したか」、パート 2「診療報酬編～2025 年に向けた改定のステップを考える」、パート 3「パイロット調査実践報告: 医療計画のテーマ分析～47 都道府県の好事例を探して～」の発表を聞き、最後のパート 4 では 4 人のパネリストとご来場者(約 160 人)が一体となって、だれがどのように改革をリードしていくべきかを議論しました。パート 3 では、医療計画に含まれる 8 テーマについて、発表者が 47 都道府県の計画を実際に読んだ上で、得られる教訓を発表しました。現在の医療政策のマクロ的視野とミクロ的視野を合わせた全体像を俯瞰し、今後の改革の実践に必要な工程をイメージすることができる良い機会となりました。



2013 年度公開シンポジウム風景

#### 〈4〉成果発表会

H-PACのグループ研究活動は、社会の現実的な受け手に提言することを目指して行われます。プログラム終了時に開催する成果発表会は、コミュニティー内での活動と相互フィードバックにより得られた成果を、社会に向けて発信する第一歩の場です。「医療を動かす」プロセスにおいて各ステークホルダーの頂点に立たれ、意思決定を行われている方々に向け、訴求力のあるプレゼンテーションに磨き上げることが求められます。

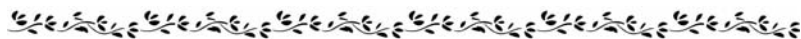
2014年3月23日に行った第3期成果発表会では、各グループからのプレゼンテーションに対し、お3人のゲストコメンテーターから親身なアドバイスや、今後の活動継続・実践につながるコメントを頂戴しました。

##### 第3期成果発表会 ゲストコメンテーター (五十音順、所属・肩書きは開催当時)

- ◎坂本 すが氏 日本看護協会会長
- ◎原 徳壽氏 厚生労働省医政局長  
代理 佐々木 昌弘氏 医政局指導課医師確保等地域医療対策室長
- ◎横倉 義武氏 日本医師会会長

#### 〈5〉H-PAC第3期 成果物の公開

H-PACウェブサイト<http://h-pac.net/>に掲載中です。



#### ■H-PAC 第3期 参加者

「患者支援者」「政策立案者」「医療提供者」「メディア」の4つの立場から募集し、経歴と小論文の内容に基づく採点委員会による審査・選考を経て、42人が参加しました。

内訳と参加者の主な属性等は次のとおりです。なお、参加者の居住地は首都圏にとどまらず、遠隔地からの参加も複数みられました。

**患者支援者** 8人(患者団体主宰者、医療ソーシャルワーカーほか)

**政策立案者** 10人(厚生労働省職員、市議会議員、自治体職員、職能団体政策担当者、経営コンサルタントほか)

**医療提供者** 16人(病院勤務医師、診療所医師、看護師、医薬品/医療機器メーカー社員、医療機関企画管理担当者ほか)

**メディア** 8人(全国紙記者、テレビ局記者、専門誌編集者、フリーランスライターほか)

## H-PAC 3 期生 参加者の声（敬称略）

### 〈患者支援者〉

**若尾 直子（NPO法人がんフォーラム山梨  
理事長）**

自らのがん告知体験から「山梨の医療を変えたい！」と思い、アドボカシー活動を始めた。しかし、体験者としての立場だけでは視野が足りない。H-PAC では、医療政策の向上を目指す多くのステークホルダーとフラットな立場で自由に意見交換ができた。私にとってこの時間はとても居心地のいい有意義なものだった。この体験は次のステップへの想いを大きく広げてくれた。



**武川 篤之（認定NPO法人日本アレル  
ギー友の会）**

最大の収穫は、気づきと人脈です。斯界の泰斗の講師が続々と登場し、各々重要な論点をお仕着せでなくさらりと話され、意見交換もできる加えて、4 ステークホルダーの人たちとの交流の場が与えられ、PDC Aで課題に突っ走る。西郷隆盛の言葉に「大事に望みては、機会は是非、引き起こさざるべからず」とあります。先ず参画を！ 必ずや来3月には新たな自分を発見するでしょう。待ってます！



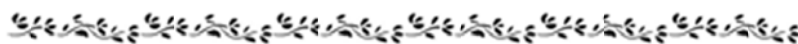
**内田 絵子（NPO法人ブーゲンビリア 理事長）**

医療をよくしたい！ 皆保険制度を維持したい！ 医療資源の配分を考えよう！ そんな課題を感じたらもう傍観者ではいられません。医療改革を成功させるには市民参加は必要不可欠です。各ステークホルダーが集い、敬意を払いながら自分の役割を認識して責任を果たそうとするひたむきな姿勢と活動は H-PAC の 最大の魅力です



**池ノ谷 ひろみ**

あらゆる意味で刺激的な1年でした。特に 毎回のグループワークは短時間で人の意見を理解し自分の意見をはっきりさせる訓練となり、今も日常に役に立っています。それぞれの専門分野を越え、皆さんの個性が毎回キラリと光り、楽しみでした。政策立案者もメディアの方も身近に感じられ “医療を変えたい” という目的のもとに参加した同期生の、今後の活躍が楽しみです。



### 〈政策立案者〉

**高崎 洋介（厚生労働省大臣官房国際課  
課長補佐）**

この度は、貴重な機会を頂き、本当にありがとうございました。優しい講師陣の先生方のもとで、様々な保健・医療に関係する志の高い方々と議論できたことは、非常に有意義でした。また、数々の合理的思考の訓練や問題解決策の方法は、今後公務においても活用させていただきます。



**井阪 尚司（滋賀県議会議員）**

社会保障制度改革が進む中、地域の医療・福祉をどう展望し、どのような施策を講じるのか。今、政策立案とその実現力が問われています。H-PAC は社会人に門戸を開け、4 つのステークホルダーの人達と議論を深めていく。構想力と実践力を磨くこんなエキサイティングな学びの場は他にはありません。多くの方にこの素晴らしさを実感してほしい。



**中村 奈央（日本看護協会）**

正直、最初はどれほどの協業ができるか不安でした。でもそれは杞憂！ 気持ちばかりが先走る私の拙い「思い」を、熱く頼もしい同期達が皆で鍛えてくれました。政策立案者は時にフィージビリティにとらわれがちですが、H-PAC に参加して、「医療はもっと動かせる」と思えるようになった。卒業後もグループ活動を続けています！





## 〈医療提供者〉

### 小川 朝生（国立がん研究センター東病院 精神腫瘍科長）



4種のステークホルダーそれぞれに、価値観と見方があり、あわせて限界があります。その枠を乗り越えて全体をとらえるためには、お互いのできること・苦手なことを分かること、であり、それが様々な場面で動かす力になるのだと実感しました。H-PACは安心して体験できる数少ない貴重な場です。

### 川畑 測久（国立病院機構本部 医療部病院 支援部 支援課長）



これまで国・地方自治体では医療行政を、また医療現場では病院経営の実務に携わってきましたが今一度原点に立ち戻り、ゼロベースで見つめ直したいと思い、応募しました。参加者の背景は様々であり、多士済々のメンバーから受ける心地良い刺激は、自分自身の新たな知識や活力の源泉になりました。もしチャンスがあればもう一度参加したいと思う、中身の濃い1年間の活動でした。

### 遠田 光子（独立行政法人 地域医療 機能推進機構 医療安全専門職）

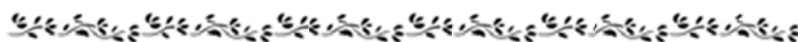


短い時間にエッセンスを盛り込んだ14のテーマ別講義と立場も年齢も異なる4つのステークホルダーの皆さんとの議論は、多角的な視野や考え方に大きなヒントをいただきました。多くの方との出会いと協働が、できないと思っていたことも可能にしてくれます。修了した後も、継続的な活動や情報共有があり魅力的です。

### 竹内 貴紀（テルモ株式会社）



前半は医療に関する問題を多面的に学び、後半は自分達の選択したテーマについて、4つのステークホルダーで議論を深め、初期成果物をまとめました。医療を取り巻く社会的問題に関する理解を深め、課題解決に向けた提言まで考える、厳しくも充実した活動です。仲間との出会いを大切に、今後に繋げたいと思います。



## 〈メディア〉

### 米原 達生（NHK社会部 厚労省取材キャップ）



何かニュースのネタはないか。そんな下心で門を叩いたH-PACは、「医療を変える」という志の元に集まった秘密結社(?)でした。第一線の講師や仲間との出会い、惜しみない情報提供、毎週異なるテーマでの闊達な討論とプレゼン。長年の取材生活を見直し、様々な視点から医療を考える良い機会となりました。

### 井上 愛彩（時事通信社社会部科学班）



医療を良くしようとしている人の存在を、数多く知った1年でした。患者支援者、医療提供者、政策立案者という他の3つのステークホルダーの深い知識や重いであるわたしの情報の浅さを痛感しました。でも成果を世の中に伝える役割は担えるし、担っていこうと改めて感じています。

### 鈴木 敦秋（読売新聞医療部）



4つのステークホルダーが集まることで、いろいろなことを学びました。それぞれに異なること、それぞれが弱点を持っていること、相互補完が可能なこと。意見を交わすことで、超高齢社会、がんと認知症の合併、大都市郊外地域の危機、地域包括ケアというキーワードが浮かびあがり、研究や本紙の記事につながりました。

### 中澤まゆみ（ノンフィクション・ライター）



メディアとはいえ、普段は孤独なひとり作業。4つのステークホルダーによるグループワークはとても刺激的でした。新しい出会いの中で、医療政策を含めた「医療」全般について学べたのも大きな収穫でした。個人的にもテーマである「住民参加」をどう実現していけるのか、これからも、H-PACの仲間とともに考えていきたいと思っています。

**【問い合わせ先】**

**東京大学 公共政策大学院 医療政策教育・研究ユニット(HPU)  
医療政策実践コミュニティー(H-PAC)事務局**

**〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1**

**電話:03-5841-7879**

**E-mail [h.pac.jp.info@gmail.com](mailto:h.pac.jp.info@gmail.com)**

**URL <http://www.pp.u-tokyo.ac.jp/HPU/> (「東大 HPU」で検索)**

**\*\*\*原則として電話によるお問い合わせはご遠慮ください\*\*\***